

仏教通信3月号 『不安の正体とは』

最近、社会の流れを見ていると、「共生」という理想が揺らぎ、厳しいルールで他国の人を選別(分断)しようとする風潮が浮き彫りになっています。世界に目を向ければ、欧米を中心に「多民族社会」への不安が、今の日本以上に「外国人問題」や「反移民」といった排斥運動の形で見え始めています。私たちは今、社会を覆う「不安の正体」を正しく見極めなければなりません。歴史を振り返れば、20世紀にユダヤ人を「悪の民族」として迫害した欧州の悲劇や、関東大震災の混乱の中で流れたデマによって人々に向けられた殺意など、忘れてはならない苦い教訓が数多くあります。こうした悲劇に共通するのは、人々が抱く不安に対して、誰かを『敵』や『異物』として攻撃したり、遠ざけることで解決を図ろうとしてしまった点です。自分たちとは違う文化や背景を持つ人に会った時、私たちはつい戸惑いを感じてしまいます。その不安から、相手を『排除すべき存在』だと決めつけてしまうことは、自分たちの安心を守る近道のように思えるかもしれませんが、しかし、誰かを『自分たちとは違うもの』として排除する論理は、一度広がれば歯止めが効かなくなる危うさを持っています。その攻撃は、やがて身近な隣人であった少数派の人々へ、そして最後には自分たちとは意見の異なる仲間へと向けられていくのです。これこそが、他者を拒絶することの危うさです。特定のグループを標的にする考え方は、偏見と憎しみを深めるだけであり、対話を閉ざし、社会の中に「分断」を生んでいくのです。

私たちに求められているのは、不安を誰かへの攻撃に変えることではなく、対話を通じて「共に生きる道」を探る知恵ではないでしょうか。こうした混迷の時代だからこそ、仏教で説く『上品(じょうぼん)』という生き方を考えてみたいと思います。『上品』とは、見た目の華やかさや育ちの良さで決まるものではありません。どんな状況でも相手への敬意を忘れず、相手の苦しみを自分のこととして想像する『慈悲の心』を持つことです。そして、物事の本当の姿を冷静に見抜く『智慧』を持ち、正しさを選ぼうとする姿勢を指します。私たち人間は、家族や友人を大切に温かい心を持っています。その一方で、時として誰かを疑ったり、排斥したりしてしまう脆(もろ)さも抱えています。情報のあふれる現代社会では、誰かを攻撃することで一時の安心感を得ようとする風潮があります。しかし、そうした空気に流されそうになった時こそ、立ち止まり考えることが大切になってくると思います。『不安の正体』は何なのか? 誰かを否定することで、私たちの平穏は守られるのか? そう自問自答し、誰かを攻撃したくなる誘惑をきっぱりとはねのけ、対話の道を閉ざさないことこそが、私たちが身につけたい『上品』な智慧なのかもしれません。

お釈迦さまの教えは、遠い昔の経典の中だけにあるわけではありません。日々の暮らしや、時に心が苦しくなるニュースの中にも、私たちがどう生きるべきかの指針は示されています。今、私たちに求められているのは、誰かを追い出したり、厳しく制裁するためのルールや法律ではなく、善も悪も併せ持つ自らの心を見つめ直すことではないでしょうか。自分のなかに生まれ続ける負の感情(怒り、憎しみ、嫉妬心)を『智慧』で静め、他者の痛みに寄り添う『慈悲』を持つて向き合う。それこそが、本来の『上品』な生き方の実践だと考えます。不寛容な時代だからこそ、お釈迦さまが説く「相手を思いやる生き方」を選び取り、偏見を超えた「信頼」と「思いやり」に基づく社会を共に築いていけたらと願っています。

